

秋田大学附属図書館の将来構想を考える（提言）

～アクティブラーニングの拠点を目指して～

平成27年3月

秋田大学附属図書館将来構想ワーキング

秋田大学附属図書館の将来構想を考える（提言）
～アクティブラーニングの拠点を目指して～

秋田大学附属図書館将来構想ワーキング

目次

1. はじめに
2. 提言の概要
3. 事業の具体的な取り組み方と考え方
 - (1) アクティブラーニングについて
 - ① 現状と課題
 - ② 附属図書館に適したアクティブラーニング授業への取り組み
 - (2) 施設・設備について
 - ① 現状と課題
 - ② アクティブラーニングのワンストップ機関として
 - (3) 学術情報基盤整備と研究支援サービスの充実
 - ① 現状と課題
 - ② 研究支援サービス
 - ③ 学術情報発信とオープンアクセス
 - (4) 社会貢献
 - ① 現状と課題
 - ② 郷土資料の収集・保存とデジタル・アーカイブ化
4. 専任教員の配置と人材育成のあり方について
5. おわりに

資料

1. アクティブラーニングの拠点としての附属図書館の機能強化

参考資料

1. 秋田大学附属図書館将来構想ワーキング委員名簿
2. 秋田大学附属図書館将来構想ワーキング議事要旨（第1回～第4回）

1. はじめに

秋田大学附属図書館の基本理念は、「秋田大学附属図書館の理念・目標」として定められ、ホームページ等を通じて広く公開されている。理念の重要性は変わるものではないが、グローバル化による社会の大きな変化を受けて、大学図書館に求められる役割も多様化してきた。理念を実現するための事業計画、中長期的な方向性は不断に見直しを行わなければならない。

そこで、平成26年度には図書館長を議長とした「附属図書館将来構想ワーキング」を設置し、図書館の機能強化についての検討を行い、提言を行うこととした。ワーキンググループは、図書館長の他、各部局において図書館に携わる教員、学生、図書館職員によって構成されている。今回の提言が今後ますます加速する大学改革の一助となれば、望外の喜びである。

2. 提言の概要

すべての学生に、グローバル化社会を生き抜くための人間力をもってほしい。そのためには受身型の座学から、学生自らによる主体的、能動的学修であるところのアクティブラーニングへの転換が必要である。秋田大学附属図書館では、そのための施設、方法論、教育プログラム等を整備し、図書館で行うのに適したアクティブラーニングの内容や方法を確立する。

学部や研究科の垣根を超えた図書館は、全学的な知の活動の拠点である。高騰を続ける電子ジャーナルを始めとする学術情報基盤の安定的な整備に努め、研究支援と情報発信を強化する。

図書館は地域にも開かれている。現役の学生、教職員のみならず、市民も含めた幅広い人材が集い、共に活動している。本と人、人と人との出会いの場を創出し、地域における知のコミュニティ作りに貢献する。

3. 事業の具体的な取り組み方と考え方

(1) アクティブラーニングについて

近年の高等教育においては、基礎学力、専門知識に加えて、コミュニケーション能力、問題解決力、価値判断力といった社会的汎用能力を備えた人材の育成が求められている。そのためにはグループワークや体験学習、プレゼンテーション、ピアサポート等、いわゆるアクティブラーニングと呼ばれる技法が効果的である。

附属図書館では従来、学生用図書や視聴覚教材、教育用パソコンをはじめとしたコンピュータ環境を整備し、情報リテラシーを教えることで学生の基礎学力の向上に寄与してき

た。また専門書や電子ジャーナルをはじめとする学術情報基盤を整備することで、各分野における専門的研究の発展に貢献してきた。しかしながら、分野を横断、統合して新しい知を創造したり、学んだ知識を組み替えて、社会に新たなイノベーションを生み出したりすることのできる人材を育成するには、従来の図書館のあり方だけでは不十分になってきている。

大学で単に「学ぶ」のではなく、「学び方を学ぶ」ことのできる学生を育成する。図書館に保存・蓄積された知を活用し、社会に生かすことのできる人材を支援する。

秋田大学附属図書館では、これらの課題に挑戦する。(資料1)

① 現状と課題

図書館では、図書館情報リテラシー教育を、教養基礎教育の1単位(選択科目)として開講している。また、カリキュラム化されない部分でも、電子ツール、図書館資料を効果的に利用してもらうための各種講習会を開催している。

中央図書館では、平成24年から、学習サポーターを配置し、学習相談(レポートの書き方など)や文献検索指導を行う窓口を設けている。

ワーキングでは、教員によるアクティブラーニングの実践についての報告、検討がされた。学生側からの意見として、実際のアクティブラーニングに入る前にそのやり方、プレゼン、情報検索、PBL等の技法について学びたいとの声があがった。

国際的な人材の育成のためには、単なる英語力だけに留まらない普遍的なコミュニケーション能力や、プレゼンテーション能力が求められていること、また大学院生に対しては、それぞれの専門教育を超えた、研究科横断型の「教養教育」が求められていることも指摘された。

アクティブラーニングにおいては、何よりも学生の自発的、主体的な取り組みが重要となる。学生のモチベーションを引き出す手法として、サークルのネットワークの活用、合同授業による活性化等があげられた。また意欲のない学生をフォローするため、授業を必修カリキュラムに組み込む必要性も語られた。

② 附属図書館に適したアクティブラーニング授業への取り組み

アクティブラーニングの定義、内容は幅広く、多様な反面、必ずしもそのあり方についての共通理解は得られていない。附属図書館では、基礎学力向上のための情報リテラシー教育は行っているが、それを超えたより多彩な学習スタイルに応じた教育プログラムの開発にまでは至っておらず、経営層や教育担当部署との認識共有や連携も不十分なのが現状である。今後、秋田大学におけるアクティブラーニングのさらなる推進、深化のために、附属図書館として取り組むべきアクティブラーニングの内容と方法について検討し、確立する。

(2) 施設・設備について

① 現状と課題

手形地区では、平成 18 年前後には、総合情報処理センターと中央図書館の連携強化を構築するための合築構想が存在したが、残念ながら認められなかった。

平成 23 年には、中央図書館単独での改修が行われ、ラーニングcommonsが設置された。本道地区の医学図書館でも平成 25 年に、改修によりラーニングcommonsが設置され、運用が開始された。

しかし、平成 26 年 4 月の国際資源学部の設置もあり、グループ学習をはじめとするアクティブラーニングの場がますます不足していることは、本ワーキングでも指摘され、増築も含めた建物の将来構想の策定は、引き続き求められている。

保戸野地区にある秋田大学附属学校園の図書室に対し、附属図書館では、平成 23 年から職員二名を派遣し、図書の遡及入力をはじめとした業務支援を行っている。入力したデータを活用できる図書システムの導入は今後の課題となる。中学校図書室は生徒がアクセスしにくい場所にあり、移転や、老朽化した什器の充実が求められている。

保戸野地区ではこのような学校図書室整備とは別に、平成 28 年度から予定されている教職大学院の設置に応じた、院生向けのアクティブラーニングの場、commonsスペースの設置も求められている。

② アクティブラーニングのワンストップ機関として

附属図書館のラーニングcommonsは、複数の利用者が集い、印刷物や電子情報等、様々なコンテンツを用い議論を進める学習スタイルを可能にするものである。これは図書の収集、保存、閲覧を行う伝統的な“静の図書館”を土台にして、アクティブラーニングを活発に行う“動”の図書館へと発展したことを意味している。

全学から利用者が集い、地域に開放されている図書館は、開かれたアクティブラーニングの場に適している。しかしながら、利用者の急激な増加により、慢性的なスペース不足にさらされていることも事実である。今後は増築を検討すると同時に、アクティブラーニングゾーンとして、キャンパス内の既存施設との連携強化を図っていく。それにより、場所とコンテンツ、人的支援を併せ持ったアクティブラーニングのワンストップ機関としての整備を目指す。

将来的に、拡充されることが望ましい施設・設備として、以下のものがあげられる。

- ・共同学習やディスカッション、ディベートを可能とするグループ学習室の増設
- ・プレゼンテーション演習や、語学学習、動画学習のための設備や什器類
- ・動画教材開発を可能とするスタジオの新設

整備計画全般においては、自学自習を行う学生が長時間滞在する場所としての美しさ、快適さ（空調や照明等）は勿論、セキュリティ（防犯）、省エネ対策、バリアフリーなどへの十分な配慮が必要である。

また、開館時間の拡大延長に対する要望は依然として大きい。利用率と開館にかかるコストを分析し、最適な開館時間を追及する。職員のいない時にも、IC カードを使って入館

できる 24 時間利用の拡大も、検討のひとつとなる。その際にはセキュリティの確保にも十分配慮したい。

(3) 学術情報基盤整備と研究支援サービスの充実

① 現状と課題

附属図書館では、電子ジャーナルをはじめとした学術情報基盤の、全学的整備に努めているところではあるが、他大学と比較して、タイトル数はまだまだ少ないのが現状である。

そのため本学における整備のさらなる充実は勿論、地域における共同利用のあり方も追求する必要がある。

また学習、研究に必要な資料を他大学から取り寄せる学生、院生に対する負担の軽減策、費用の支援等も今後の検討課題となる。

② 研究支援サービス

秋田大学では、平成 27 年から学術認証フェデレーションに参加し、大学で契約している電子ジャーナル等が学外からも利用できるようになる。

また若手研究者支援としての、情報検索、情報管理講習会も随時開催している。参加率を高めるための広報の充実、内容の見直し等を、積極的に行っていく。

③ 学術情報発信とオープンアクセス

附属図書館では、平成 20 年度から、秋田大学学術情報リポジトリ (AIR) を運用し、大学で作成された学術研究成果及び教育成果を電子的に保存し、インターネットを通じて公開、情報発信を行っている。

高騰を続ける電子ジャーナルに対して、学術文献に無料でオンラインアクセスできることを目指す「オープンアクセス」運動は有効な対抗運動である。その成果は最近の機関リポジトリや OA ジャーナルの隆盛に現れているが、その意義を広く一般に周知するため、オープンアクセスウィークが毎年 10 月にもうけられ、全世界においてイベントが開催されている。リポジトリへの登録件数を増やすために、その期間に合わせた企画なども今後検討していきたい。

(4) 社会貢献

① 現状と課題

図書館では図書の貸出も含め、地域住民が気軽に利用できる体制を整え、最近では、高校生の利用も増加している。また「子ども見学デー」への参加や各種展示会の開催、近隣の博物館等への貴重図書の貸出等、人と本とが触れ合う機会を設けている。

今後も公共的な知の拠点として、図書館開放事業には、積極的に取り組んでいく。財源については、学内で措置される運営費だけでなく、外部の寄付金、助成金の積極的な活用を考える。

② 郷土資料の収集・保存とデジタル・アーカイブ化

附属図書館では長年にわたり、郷土資料の収集を行ってきた。中でも江戸時代に描かれた鉱山絵巻や絵図類は、附属図書館が持つ貴重な郷土資料である。鉱業博物館や、地域のミュージアム等に展示のための貸出も行っているが、利用に伴う原資料の劣化も生じ、補修を余儀なくされているのが現状である。今度はこれらの資料をデジタル化し、インターネットで広く一般に公開することで、原資料の保存と両立した利活用を広げたい。これにより、学校教育や生涯学習における教育用コンテンツ作りが広まることも期待できる。同時に、今後も郷土の資源を後世に残すため、資料の積極的収集・保存を継続して行うことが必要である。

4. 専任教員の配置と人材育成のあり方について

図書館におけるアクティブラーニングや社会貢献事業を充実させるには、新たな教育プログラムの創出が必要である。例えば、実際のアクティブラーニングに入る前にその技法について学ぶアクティブラーニング支援のための授業、英語力を超えた普遍的なコミュニケーション能力や異文化への理解力を養う授業、郷土資料を活用した地域の歴史や文化に関する理解を深めるための授業といったものが考えられる。

これらは教養教育の一環であるが、近年の中教審答申や文科省の提言においては、専門教育を超えた、研究科横断型の科目の創設、学際型の人材の育成が求められている。一、二年生対象の「基礎的な教養教育」だけでなく、三、四年生、もしくは大学院生対象の「学際的な教養教育」としての展開も望ましい。

これらの教育プログラムの創出のためには、新しい授業の企画・開発を中核的に担う人材の配置が必須となる。そのための学内組織との連絡・調整、学外の企業・機関等との連携、地域的なコーディネートや広報を主なミッションとする専任教員の配置が、今後検討されるべきである。

専任教員の具体的な業務としては以下のことが考えられる。

- ・アクティブラーニング推進のためのFD、SD活動
- ・附属図書館の資料と学習環境を十分に活用する秋田大学版アクティブラーニング授業の開発と実施
- ・学生主導型の企画や公開授業の実施

教員は勿論、図書館職員にも、今後ますます高度化、多様化する大学図書館の現場において、従来の司書、図書館学の枠を超えた、より高度な専門性が求められている。学外の専門研修への積極的な派遣や、遠隔研修等を通じて、能力の開発、育成を行う。

また、窓口で同一のサービスが提供できるよう、非常勤職員も含めた図書館内の研修体制も改善、強化していく。

5. おわりに

本事業の取り組みは、附属図書館単独ではなく、全学的な大学改革の路線上で、実現さ

れるものである。

また組織的な連携・協力は、学内は勿論、地域、全国、世界的な図書館ネットワークにまで広げ、今後ますます推進、強化されなければならない。

アクティブラーニングは、異なる社会的、文化的背景を持つ他者とのコミュニケーション力を養うことで、自らの持つ知識を応用、批判的に組み替えて、新たな社会的協働を出現させることを目的とするものである。

そこから生まれる従来の専門分野を超えた新たな知やイノベーションは、開かれた多様な社会を発展させる。

アクティブラーニング推進に向けた秋田大学附属図書館の機能強化への取り組みが、澤田ビジョン2014の理念実現に貢献し、グローバル化時代に羽ばたく人材の輩出につながることを期待する。

アクティブラーニングの拠点としての附属図書館の機能強化

資料1.

- 大学で単に「学ぶ」のではなく、「学び方を学ぶ」ことのできる学生を育成する。
- 図書館に保存・蓄積された知を活用し、社会に生かすことのできる人材を支援する。

